

ほんばこ



No. **51**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 51 号 (通巻第 67 号)

2016 年 12 月 7 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・『禁演落語』 細野 誠一 2～3 p
- ・〈 図 書 紹 介 〉
飯島裕子著『ルポ 貧困女子』岩波書店 (2016 年 9 月刊行)
上田 麻里 4～5 p
- ・最近の受入図書 (2016 年 7 月～2016 年 11 月受入) 6～7 p
- ・教育図書館のご案内 8 p



禁 演 落 語

細 野 誠 一

先日（10月17日）、第14回連合会館寄席を開催しました。この落語会は、地元町会（神田駿河台周辺5町会）、連合をはじめとした労働諸団体、そして、連合会館を利用いただいている皆様に、日頃の会館運営に対するご理解とご協力に感謝するとともに、伝統文化を広め、地域の交流の場を提供することを目的に、公益財団法人総評会館が主催者となって毎年開催しています。

この連合会館寄席の開催にあたり、主催者あいさつとして、何を話そうかと思案しながらテレビを見ていると、「禁演落語 復活70周年」のニュースが報道されていました。



皆さんは、「禁演落語」という言葉をご存知でしょうか？

実は、私、（公財）総評会館に勤務する以前は、日本専売公社・日本たばこ産業(株)で36年間勤務（内、大半を労働組合役員として活動）していたものですから、昨今の喫煙規制が強化・拡大される状況の中で、「禁煙」という言葉に過敏に反応してしまいます。

「へえ～、70年も前から「禁煙」を推奨する落語があったんだ」と思いながら、興味深くニュースを見ていると、「禁演落語」の演の字が、「たばこの煙」の煙では無く、

「演じる」の演でした。

つまり、演じる事を禁じられた落語が「禁演落語」ということでした。

NHKニュースでの報道では、1941年（昭和16年）10月30日に「禁演落語」となった53演目が、終戦後の1946年（昭和21）年9月30日に解禁されてから70周年となったという内容でした。

それでは、なぜ禁演になったのかということ調べてみると、「戦時中の昭和16年10月30日、時局柄にふさわしくないと見なされて、浅草寿町（現台東区寿）にある瀧山本法寺境内のはなし塚に葬られて自粛対象となった、廓噺や間男の噺などを中心とした53演目のこと。戦後の昭和21年9月30日、禁演落語復活祭によって解除。」と記されていました。

また、関連して「自粛禁演落語廿七種」のことも記されており、「昭和22年5月30日、連合軍最高司令官総司令部民間情報部、すなわち進駐軍（占領軍）の検閲機関の指示に応じる形で選ばれて、落語協会と日本藝術協会の連名で自粛対象となった、軍国主義的、暴力的、荒唐無稽にすぎるなど見なされた27演目のこと。昭和28年の占領体制終了によって自然解除となった。」とありました。

つまり、昭和16年当時の正に「太平洋戦争に突入する直前の世相」を反映して、戦時体制にふさわしく無いと思われる落語が封印されてしまい、終戦後1年間を経て解禁されました。そして逆に、終戦後は、軍事的色彩の強い落語が封印されてしまったということです。

禁演落語を調べることによって、落語と

いう伝統文化、庶民の笑いが戦時体制の前後で時の権力者（支配者）によって、右往左往した事実を初めて知りました。

そして、強く感じたことは、「自由にものが言えない世の中に逆戻りしては、いけない」ということであり、「そうさせてはいけない」ということです。

前置きが長くなりましたが、改めて、民主主義とは、言論の自由とは、憲法とはを考えさせられました。

一強多弱といわれる政治状況、改憲勢力が2/3を越える国会勢力の中で、改憲に向けた憲法調査会も動きだしました。

一方、経済のグローバル化が進み金融資本主義のもとで、格差が拡大し、貧困問題も深刻化してきています。これらのことが、絶望感を生み、閉塞感を高め、差別意識を醸し、知らず知らずのうちに敵を作りだしてしまい、戦いへと発展する危険性を孕んでいます。

戦後70年間、日本では誰一人戦争で亡くなった方はいません。単に平和憲法があるからということではなく、平和憲法を守り、その理念を実践してきたからこそ平和が守られてきたと痛切に感じています。

「平和」を壊してはいけません。「平和」だからこそ、安心して暮らすことができ、働くことができ、自由にモノを言うことができ、笑うことができるはずです。

どんな理由があろうとも、正しい戦争はありません。勝っても、負けても結局犠牲になるのは、一国民です。そして、残るものは憎しみしかありません。

戦争を二度と繰り返さないと誓った平和憲法を守り、世界に軍隊（自衛隊）を派遣するのではなく、平和を発信する国・日本

になって欲しいものです。

「ゆで蛙」にならないように、どんなに小さなことに対しても自粛することなく、平和の原点である民主主義と言論・表現の自由を守り、秋の夜長は、読書と落語で大いに笑って暮らしましょう。

2016年10月

公益財団法人総評会館 専務理事
一般財団法人日本教育会館 理事

はなし塚

（台東区有形文化財）
（長瀧山本法寺）
台東区寿2-9-7）

この塚が建立された昭和16年10月、当時国は太平洋戦争へと向かう戦時下であり、各種

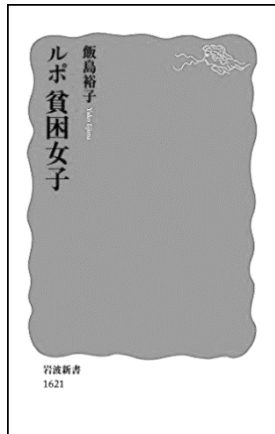
芸能団体は、演題種目について自粛を強いられていた。落語界では、演題を甲乙丙丁の四種に分類し、丁種には時局にあわないものとして花柳界、酒、妾に関する囃、廓囃等五十三種を選び、禁演落語として発表、自粛の姿勢を示した。この中には江戸文芸の名作といわれた「明烏」「五人廻し」「木乃伊取」等を含み、高座から聴けなくなった。「はなし塚」は、これら名作と落語界先輩の霊を弔うため、当時の講談落語協会、小咄を作る会、落語講談家一堂、落語定席席主が建立したもので、塚には禁演となった落語の台本等が納められた。

戦後の昭和21年9月、塚の前で禁演落語復活祭が行われ、それまで納められていたものに替えて、戦時中の台本などが納められた。

（台東区教育委員会）



《 図 書 紹 介 》



飯島 裕子著『ルポ 貧困女子』
岩波書店（2016年9月刊行）

このところ、「女性活躍推進」といった威勢のいいキャッチフレーズが盛んに唱えられています。メディアには、華々しく活躍するキャリア女性の姿や、貧しいながらも清らかに「ビンボー生活」を送る脱サラ女性がしばしば登場します。けれども、大多数は、そんなにうまくいくわけはありません。

本書では、①非正規雇用もしくは無業、②年収二〇〇万円未満、③就職氷河期世代、のいずれにもあてはまる女性（学生、シングルマザー除く）を「氷河期世代」と名付け、彼女たちへのきめ細かな聞き取りを中心に記録しています。

驚かされるのは、彼女たちの先輩にあたるシングル女性の多くに関して、従来、実態を示す満足な統計すらなかったということです。本書の中の表現を借りれば、「シングル女性は『結婚できないかわいそうな女』や『離婚するようないからん女』として処理され、貧困は社会構造上の問題として把握されることはなかった。彼女たちは『例外』であり、『残余』であった」というわけです。そこから「貧困にすらなれない」「見えない」女性たち、ということ

が浮かびあがってきます。

本書の1章、2章では、家族に着目し、従来、「家事手伝い」という名のもとに見過ごされることが多かった女性のひきこもりについても考察を行っています。家族は、もちろん支えになることもありますが、逆に、家族こそが時にはさまざまなリスクをはらむものになり得ることが見えてきます。

3章、4章では、多くの女性たちが、いま直面している正規・非正規雇用の労働実態に目を向けています。雇用形態にかかわらず、時の労働状況に翻弄されて、社会のなかで“都合良く”働かされている事実にあくせくとした思いを抱かずにはられません。

つづく5章では、この年代の女性たちが多かれ少なかれ受けている、結婚・出産プレッシャーについての考察が展開されます。国を挙げての少子化対策が、ますます女性たちに生きづらさを感じさせていることが見えてきて切ない限りです。

6章では、皮肉なことに、「女性活躍推進」の名の下に、却って女性の分断と二極化が拡大している現実が紹介されています。

そして、終章では、著者が考える解決策が模索されていきます。

多くの困難を抱える人々の現場を丹念に取材して歩いているルポライターの著者は、自身、執筆当時「三〇代／女性／フリーランスという不安定な身の上かつシングルで」「ちょっとしたボタンの掛け違いでいつ自分も貧困に陥るかわからない」「当事者の一人という認識があった」と書かれています。長らく不況が続く出版業界に身を置く担当編集者の私自身もまったく同様の思いでした。

私は、一編集者として、『ワーキング・プア』『子どもの貧困』『子どもの貧困Ⅱ』『憐貧困大国アメリカ』『家事労働ハラスメント』『ひとり親家庭』など、気がつけ

ば、「貧困」という言葉が入った、あるいは直接タイトルには入ってなくても、そのことを主要なテーマとしてとりあげている書目を何冊も企画したり編集したりしてきました。けれども、現代日本の若年女性が直面している貧困問題に切り込んだ本書の実現までには、非常に迷うことも多く、予想外に時間がかかりました。

女性の貧困や雇用問題がなかなか注目されることなくきたことに、いつも釈然としない思いをいただき、なぜこの問題は見過ごされ、あるいは放置されてきたのか？ という疑問は胸に抱いてきたのですが、一方で、それを真っ正面から問うて行くことの難しさも強く感じていたからです。

「女性たちの経験は衝撃的なものが多かった。しかしショッキングな内容であるほど、背景にある貧困の問題は、まるで目眩ましにあったように、見えなくなってしまう」「メディアで取り上げられる『女性の貧困』もまた驚くようなものが多い。人々の関心を惹きつける上で有効な手段であるかもしれないが、衝撃的な物語が展開されるほど、「女性の貧困」は特殊なものとして捉えられ、個人に起因した問題として処理されてしまう傾向にある」という著者の悩みは、まさに担当編集者の私の迷いでもあり、本書の編集過程で、二人して「なぜこんな状態が許されているのだろう」「どうして女性の貧困は、これまで『見えない』ものとされてきたのだろう」と何度も長時間、話し合いを重ねました。

そのなかで、「貧困にすまなれない女性たち」、そして「(彼女たちが感じている)空気のように漂う生きづらさ」を可視化させて、それらが決して自己責任によるものではなく、社会構造上の問題が大きいのだということ、明解に、力強く提示したいという思いがいつそう強くなっていきました。

著者のインタビューを通して、何人もの女性たちが繰り返し口にしていたのが、「想定外でした」「考えてもいませんでした」といったフレーズだったそうです。まさに「ちょっとしたボタンの掛け違いでいつ自分も貧困に陥るかわからない」ことがまざまざと伝わってきます。

著者は、「女性の人生の選択肢は多様化したように見える。その分、女性間の分断は進み、女性同士でも繋がることは容易ではなくなっている。広がる女性の二極化がさらにシングル女性たちの孤立化に拍車をかけている」と憂え、終章において、「脱労働」「脱家族」をキーワードに、早急に社会構造を変革していく必要を訴えています。

まずは、実態を可視化していくこと。そしてその先に、「誰一人として生きづらさを感じない社会を目指すこと」という著者の真摯な呼びかけが、ストレートに胸に響いてきます。

(岩波書店・上田 麻里)

【教育図書館にある上田さんの編集本】

- 『ルポ 保育崩壊』小林美希 2015.4
- 『雇用身分社会』森岡孝二著 2015.10
- 『子どもと本』松岡享子著 2015.2
- 『過労自殺』第二版 川人博著 2014.7
- 『ひとり親家庭』赤石千衣子著 2014.4
- 『子どもの貧困Ⅱ』阿部彩著 2014.1
- 『99歳一日一言』むのたけじ著 2013.11
- 『家事労働ハラスメント』竹信三恵子 2013.10
- 『憐貧困大国アメリカ』堤未果著 2013.6
- 『子どもの声を社会へ』桜井智恵子著 2012.2
- 『子どもの貧困』阿部彩著 2008.11
- 『ルポ貧困大国アメリカ』堤未果著 2008.1
- 『良心の自由と子どもたち』西原博史著 2006.2

ご紹介の本は、PRのきっかけとして当館で掲載させていただきました。

最近の受入図書

(2016年7月～2016年11月受入)

【各県教組刊行物】

- 『北教組史』第八集 1996(平成8)～2015(平成27)年 北海道教職員組合編 2016.8
- 『「教え子を再び戦場に送るな」の誓い新たにー抵抗と創造の軌跡』北海道教職員組合結成70周年記念誌編集委員会編 2016.8
- 『前進する神奈川の教育』第65集 神奈川県教職員組合編 2016.3

【教育総研刊行物】

- 『季刊フォーラム教育と文化』84号(2016 Summer) 教育文化総合研究所編 (株)アドバンテージサーバー 2016.7

【文部科学省刊行物】

- 『学校教員統計調査報告書』平成25年度 文部科学省著 日経印刷 2015.4
- 『文部科学白書』平成27年度 文部科学省編 日経印刷 2016.7

【平和資料】

- 『「銃後」の民衆経験』大串潤児著 岩波書店 2016.5
- 『戦争孤児と戦後児童保護の歴史』藤井常文著 明石書店 2016.9
- 『「満洲移民」の歴史と記憶』趙彦民著 明石書店 2016.7
- 『平和文集「閃光」』朝霞市立朝霞第三中学校(中條克俊)編 2016.3
- 『満州女塾』杉山春著 新潮社 1996.5

【社会・教育・軍事関係】

- 『大学入試改革』読売新聞教育部著 中央公論新社 2016.7

- 『「教育超格差大国」アメリカ』津山恵子著 扶桑社 2016.3
- 『崩壊するアメリカの公教育』鈴木大裕著 岩波書店 2016.8
- 『岩波講座 教育 変革への展望』シリーズ2～4(全7巻) 志水宏吉編 広田照幸、倉石一郎、中澤涉ほか著 岩波書店 2016.8
- 『運動部活動の理論と実践』友添秀則編著 大修館書店 2016.9
- 『コミュニティ・スクール』佐藤晴雄著 エイデル研究所 2016.8
- 『「アクティブ・ラーニング」を考える』教育課程研究会編著 東洋館出版社 2016.8
- 『マインド・ザ・ギャップ!』志水宏吉、高田一宏編著 大阪大学出版会 2016.4
- 『日本道徳教育の歴史』江島頭一著 ミネルヴァ書房 2016.4
- 『親なら知っておきたい学歴の経済学』西川純著 学陽書房 2016.4
- 『16万人の脳画像を見てきた脳医学者が教える「賢い子」に育てる究極のコツ』瀧靖之著 文響舎 2016.4
- 『無理して学校へ行かなくていい、は本当か』水野達朗著 PHP研究所 2016.3
- 『留学で夢もお金も失う日本人』栄陽子著 扶桑社 2016.9
- 『筑波発 読みの系統指導で読む力を育てる』筑波大学附属小学校国語教育研究部編 青木伸生・青山由紀ほか著 東洋館出版 2016.7
- 『日本で100年、生きてきて』むのたけじ著 聞き手・木瀬公二 朝日新聞出版 2015.7
- 『市川房枝の言説と活動』年表でたどる人権・平和・政治浄化 1951-1981 市川房枝研究会編 公益財団法人市川房枝記念会女性と政治センター
- 『介護ビジネスの罨』長岡美代著 講談社 2015.9

『公教育をイチから考えよう』リヒテルズ直子・
 苦野一徳著 日本評論社 2016.8
 『教育実践の昭和』横須賀薫著 春風社 2016.6
 『「ものづくり」と職業教育』片山悠樹著 岩波
 書店 2016.4
 『21世紀のICT学習環境』経済協力開発機構
 (OECD) 編著 国立教育政策研究所監訳
 明石書店 2016.8
 『沖縄の新聞は本当に「偏向」しているのか』安
 田浩一著 朝日新聞出版 2016.6
 『死すべき定め』アトゥール・ガワンデ著 原井
 宏明訳 みすず書房 2016.9
 『亡国の密約』山田優、石井勇人著 新潮社
 2016.6
 『幸せになる勇気』岸見一郎著 ダイアモンド社
 2016.2
 『税が払げる格差と貧困』浦野広明著 あけび書
 房 2016.5
 『燃える森に生きる』内田道雄文・写真 新泉社
 2016.5
 『私の労働研究』熊沢誠著 堀之内出版 2015.1
 『ルポニッポン絶望工場』出井康博著 講談社
 2016.7
 『アンチヘイト・ダイアログ』中沢けい著 人
 文書院 2015.9
 『私たちはどこへ行こうとしているのか』小熊英
 二著 毎日新聞出版 2016.6
 『ルポ貧困女子』飯島裕子著 岩波書店 2016.9
 『憲法と君たち 復刻版』佐藤功著 時事通信社
 2016.10
 『ルポ 保健室』秋山千佳著 朝日新聞社
 2016.8
 『日米開戦と情報戦』森山優著 講談社
 2016.11
 『情報を活かす力』池上彰著 PHP研究所
 2016.7

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『コンビニ人間』村田沙耶香著 文藝春秋
 2016.7
 『みかづき = Crescent Moon』森絵都著 集英社
 2016.10
 『つるかめ助産院』小川糸著 集英社 2012.6
 『不運と思うな。大人の流儀6』伊集院静著 講
 談社 2016.7
 『ジニのパズル』崔実著 講談社 2016.7
 『危険なビーナス』東野圭吾著 講談社 2016.8
 『99歳 一日一言』むのたけじ著 岩波書店
 2016.9
 『ゴーストバスターズ 冒険小説』高橋源一郎著
 講談社 2016.1
 『遠い唇』北村薫著 KADOKAWA 2016.9
 『最後の秘境東京藝大』二宮敦人著 新潮社
 2016.10
 <<著者からの寄贈図書>>
 『未来食堂ができるまで』小林せかい著 小学館
 2016.9
 『予算・財務で学校マネジメントが変わる』末富
 芳編著 学事出版 2016.4

編集後記

戦時中だけでなく、戦後の進駐軍（占領軍）の
 検閲機関の指示があつて禁演となつた落語があつ
 たというのは興味深いことでした。笑いには、時
 代の空気を読み取る力があることを感じます。

図書紹介の貧困女子の問題については、他人ご
 とではなく胸が痛くなりました。常に社会の問題
 に真摯に向き合つて、企画・編集なされている上
 田さんには頭が下がります。また、極めて謙虚な
 方で、編集本のご紹介については、当館からの
 お願いで掲載させていただきました。教育図書館の
 利用の方にはもちろんのこと、多くの方に読んで
 いただければと思います。

お忙しい中ご寄稿いただいた細野様、上田様に
 心から感謝申し上げます。（川内）

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
館外貸出には、利用者登録が必要です。
(ご自宅住所が確認できる身分証明書をお持ち下さい。受付で貸出カードを発行します。)
- * 返却方法
開館中 カウンター受付へ
閉館時 「ブック・ポスト」をご利用下さい。
設置場所：5F 図書館入口前
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピーサービス
(白黒1枚10円／カラー30円)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導

要領、指導書など

- 防災・減災コーナー：地震関係や防災関連図書を集めました。
- 人権コーナー：人権問題関係の図書
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 2016年4月現在約66,000冊になります。
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。

(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wop/pc/pages/TopPage.jsp>)

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

